

あらましの情景

——『新葉集』への一視座——

君嶋 亜紀

はじめに

中世に広く盛行した歌語として、「あらまし」という名詞が見出せる。概念的な語だが、その意味は、「あり」＋「まし」という形から、こうありたいという願い、もしくはこうなるだろうという予想や期待と捉えられる。南北朝期の雑歌に多く用いられており、その中には「境涯の歌」を一つの特徴とし、そこに南朝の現実を読み取るか否かが問題とされてきた『新葉集』も含まれる。本稿ではこの歌語「あらまし」を指標として、南朝和歌における現実と表現とのあり方という観点から、『新葉集』を読む際の「一視座を見出してみたい。

一 境涯の歌から

まずは『新葉集』の次の二首から取り上げてみる。

芳野の奥なる山里にすみ侍りける比、読みける

前参議持房

みよしのの山のあなたのあらましもかかろうき世はか

ひなかりけり

(雑中・1219)

元弘元年北長尾の山庄にこもりゐ侍りけるを、世の乱れによりてかしこをも又立出でて後、よみ侍りける歌の中に

文貞公

いほむすぶ山の下柴をりをりのあらましににぬ身の行へかな

(雑中・1220)

思ひかね入りにし山を立出でてまよふうき世もただ君

のため

(雑中・121)

持房(一二九六―没年未詳)は北畠親房の弟で、花園天皇の文保二年(一二三二)参議に任じられ(兼侍従)、後醍醐天皇の元応元年(一二三九)これを辞して、翌二年に任右衛門督、父師重の死にあつた元亨二年(一二三二)に右衛門督を止め(替わつて親房が任じられる)、以降前参議として過ごし、元弘元年(一二三三)七月五日に三十六歳で出家している(公卿補任「尊卑分脈」)。出家の理由はわからない。小木喬氏は、この歌から南朝につき従つて吉野あたりに住んでいたことがあることがわかる、としている。³⁾文貞公は、鎌倉末期に後醍醐天皇の倒幕計画に加わつて活躍した花山院師賢(一二三〇―一二三三)である。後醍醐天皇の朝廷で若くして昇進を重ね、元弘元年八月、元弘の乱に際して天皇の身代わりとして比叡山に赴くが失敗し笠置に逃れるも九月に落城、その地で鎌倉方に捕えられ、出家した。1220の詞書に見える北長尾(京都市右京区仁和寺の北側)の山庄に籠つたという経緯は未詳だが、井上宗雄氏は「恐らく元年に入つて病氣などの理由で山庄に隠棲、八月、天皇の帷幕に召されたのである。ちなみに師賢は翌年配地で病没(病弱であつたのではないか。)」と推測している。³⁾1219・1220はともに、吉野山中に住んだ経験や、動乱の世に生きた廷臣という人生を背景と

した歌、いわゆる境涯の歌として享受できよう。次にその表現性を見ていきたい。

この二首で「あらし」は出家に関わる語として登場している。持房の歌は、「吉野の山奥を憂き世の隠れ家にしようという願いも、(その吉野の地を俗世の憂きに巻き込んでしまった)こんな憂き世では甲斐のないことなのだ」ととれる。上句は、古今集歌「みよしのの山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれがにせむ」(雑下・90・読人不知)を前提として、このような願いの意にならう。本歌取というよりは、古歌の内容を、換言すれば吉野の本意の一つを、凝縮して引用しているという趣である。また、「みよしのの山のあなた」という表現には、都にいて深山を思う都人の視点が引きずられていることにも注意しておきたい。

『古今集』では、右の90番歌の隣に「世にふれば憂きこそまされみよしのの岩のかけみち踏みならしてむ」(91・読人不知)が並んでいるが、持房の兄親房にはこちらを踏まえ「あらし」の歌、

よそにききあらしにせしみよしのの岩のかけみち見ぬくまぞなき

(李花集・669の詞書に見える、宗良親王に贈られた歌)がある。親房は持房の出家に先立つ元徳二年(一二三〇)、

養育の任にあたっていた後醍醐天皇第二皇子世良親王の死去に際して一度出家しており、建武政権が成立してから再出仕、以後の生涯を南朝政権のために捧げた。この歌は、親房という作者名がなければ、出家して「あらし」のなつた修行僧の歌になってしまう。しかし親房の人生を考慮することによって、世の憂き時に行くところと聞いて遁世を願っていた吉野の「岩のかけみち」を俗世のために奔走することになったという意と解せる。南朝和歌を読む際、作者名が、換言すれば作者の背負う人生が、一首の歌意を左右するという例であろう。

持房や親房の歌からは、吉野を『古今集』以来の文脈に立って遁世者が希求すべき地として認識しつつ、且つ自らも出家を志しつつも、動乱の中にあつて吉野にそうした幻想を見ることができない人々の葛藤を汲み取れるのではないか。『古今集』の表現を損取して伝統的な深山吉野の詠み方を踏襲することによって、現実の吉野との齟齬が表れてしまうというありようが、彼らの現実と伝統的和歌世界との相克を体现しているように思われる。

次に師賢の歌を見る。1220の「をりをりのあらましににぬ身」、その時々のごうありたいという願いのとおりにならぬ身の行方とは、詞書にいう元弘元年の状況から推測すると、

以前は天皇親政を願って忠勤に励んだものの果たせずに隠棲することになり、今またこの地で謹んで世の平穩を祈っていればそれも通せず、再び世に立ちまじらうことになつた、ということだろうか。しかしこの歌も、詞書がなければ——作者と詠歌事情を考慮しなければ——山家にあつて感慨を述べる遁世者の歌のようにも見える。

さらに1220は、同時代の類型表現という視点からも捉えられている。同歌は「山の下柴」を「折る」と「折々の」を掛けている。山庄に籠っていたという現実を踏まえていると思われるこの部分が工夫だが、「をりをりのあらまし」という一首の発想の中核は、鎌倉後期の先行歌^④にも見えるものがある。

身ひとつに思ふ心のあらましもをりをりかはる世のな
らひかな (続後拾遺集・雑下・1189 藤原長経)

をりをりの身のあらましもかはりけり我が心さへさだ
めなの世や (風雅集・雑下・1878 従二位宣子)

いずれも我が「あらし」が世の変転につれて変わることを詠んでいる。1220には境界の歌の一側面として、同時代の類型的発想を基盤として感慨を吐露するというあり方を見出せよう。なお、続く1221は、忠臣の歌として取り上げられがちなものだが、『新葉集』では不安定な身と心との関係を

歎く1220と並ぶことで、動乱期の世に翻弄される感慨と意志との間に揺れる作者の心がたどられていく。ここは同一作者の同時の詠だが、『新葉集』には他にも、歎きや感慨と意志や決意とを交錯させるような配列が見られることは注目しておきたい。

以上、南朝歌人の現実を背景として解される「あらし」詠を取り上げ、その発想や表現が伝統や類型の上に紡ぎ出されていることを見出した。これらの歌の解釈は、作者名や詠歌事情といった、一首の表現外のものを入れざるを得ないような構造になっている。では何がそのような読みを導くのだろうか。ここには現実を呼び込むような表現というものがあるのではないか。歌語「あらし」は、伝統的発想を基盤としつつ、それと対置される現実を取り込んでいく機能を有しているように思われる。「あらし」を考察することで、南朝和歌における現実の詠み込まれ方について考える手がかりを得られるのではないだろうか。そこで以下に、南北朝期までの歌語「あらし」の形成と変容の過程を辿って、中世和歌に表れた時代相の一面を拾い上げ、さらにその中における『新葉集』の特質を考えてみたいと思う。中世の「あらし」詠の多くは題詠歌や個々の事情を捨象された歌であり、その発想や表現に一定の類型

を見出せる。

二 「あらし」前史

名詞「あらし」は、院政期から新古今時代に掛けて歌語として普及し、以後、次節に見るように十三代集の時代に盛行した。『日本国語大辞典』第二版はその語源について、「あらしごと」の『あらし』と同じと考える説もあるが疑問。」とし、また「あらしごと」の項では、「あらし」は、通常、動詞『あり(有)』に推量の助動詞『まし』の付いたものかといわれるが疑問。(後略)」としている。ただし和歌の用例を見る限りでは、述語的用法(動詞「あり」+助動詞「まし」)の「あらし」もしくは「あらしごと」を基盤として名詞「あらし」が詠まれるようになったのではないかと推測される。述語的用法としては、万葉の時代から「…ぞあらし」「あらしかば」「あらしものを」等と詠まれるが、このなかで「…ぞあらし」のような、係助詞を伴い連体形終止のものが注目される。平安時代になると、相模の「逢ふことのなきよりかねてつらければさぞあらしにぬる袖かな」(相模集・43、後拾遺集・恋一に入集⁵)のように、これを名詞句のように用いた歌が登場し、以降鎌倉時代を中心に、他の句や贈歌を受けて「さ

ぞあらしに」「さもあらしの」等と詠む例が散見される。さらに「ただあらしの」「なほあらしに」といった例も出てくる。これらは述語的用法と名詞的用法の境界的な例ではないだろうか。名詞「あらし」の早い例としては『堀河百首』に「はかなさを思ひ知らずはなれどもあらしにのみ目を暮らすかな」(1556「無常」・源師頼)が見出される。以降、中世に増加することは後述の通りだが、この語を詠む中世歌人の脳裏には述語的用法「あらし」の意味が残っていたように思われる。

また「あらしごと」の方は、『源氏物語』等平安時代の散文作品に散見される語で、関根慶子氏、大坪併治氏が取り上げている。和歌の早い例は和泉式部に見え、院政期から新古今時代にかけて用例数が集中する。そのなかで、俊恵の「憂しや我よひよひごとのあらしを思ひ出でにしてよをつくしつづ」(林葉和歌集・恋・830)と「さりとともとあらしごとをせしほどにそれにてつひによをつくしつづ」(同・恋・939)や、慈円の「あらしにいくよ夜床を払ふらむ竹吹く風の音を友にて」(拾玉集・二夜百首 105「寄竹恋」)と「見せばやな夜床にもる塵をのみあらしごとにに払ふけしきを」(同・歌合百首・105「夜恋」)のように、同じ歌人によって同じ位相で名詞「あらし」と「あらしごと」が

詠まれていた例があつて注目される。ここから、両語の差異は意味にはなく字数の差ではないか、さらに十三代集の時代では名詞「あらし」が定着していくのと表裏をなして「あらしごと」は減少していくが、それは後者が六音で用法が制限されるため、前者の方が選ばれていたのではないかと、といったことが推測されよう。なお、十三代集になると述語的用法の「あらし」も減少し、名詞「あらし」との数的優勢も逆転する。

さて、十三代集の時代に「あらし」が流行していくにあたって、その起点となつたのは、後鳥羽院の次の歌ではないだろうか。

水無瀬にて、をのことも、久恋といふことをよみ

侍りしに

思ひつつへにける年のかひやなきただあらしの夕暮
の空 (新古今集・恋一・1033⁷)

この歌は後鳥羽院が定家詠と自詠を番えた「水無瀬釣殿当座六首歌合」(建仁二年(一一二〇)六月)で判者後鳥羽院が唯一の勝とした自詠であり、『新古今集』に入集し、後に為家が『詠歌一鉢』で「ただあらしの」を制詞としている。中世の歌人たちが「あらし」を歌語として認識し積極的に取り入れていく際、この歌の存在は大きかったのではな

いかと思われる。一首からは、逢えない失望を重ねてきた今、夕暮はいたずらに期待させるだけで逢瀬が実現するとは思えないという、「あらし」という願望の語に込められる「あらし」は恋歌に多い。たとえば「六百番歌合」では六首の用例すべて恋歌である。ところが鎌倉中期以降、我が身の現実を顧み、行末を想像するような雑歌が増えていく。次節で具体的に見ていくが、勅撰集雑部に多く採られ、また『続門葉和歌集』『安撰和歌集』など僧門の私撰集にも頻出する。

行末を思う「あらし」の語義には、予期・予想と願いという幅がある。助動詞「まし」の元来有する意味の幅によるのだろう^⑨。中世の雑歌では後者の比重が大きい。恋歌では逢瀬を願うものが大半だが、雑歌の「あらし」は漠然として明記されない願いが多く、具体的な願いとしては、世を厭い、山に住むことを願う、出家や山家の歌が見出せる。

以上、「あらし」は、新古今時代を基盤として歌語として普及したと思われる一方で、十三代集の時代に新古今時代までの枠組に収まらない独自の展開を見せる。十三代集の時代にはこのような、歌道的立場を超えて多くの歌人に

用いられ、中世という時代相を探るのに有効な歌語が散見される。これを中世歌語と呼んでおく。名詞「あらし」はそうした中世歌語の一つと位置づけられよう。次に問題を十三代集に絞ってもう少し詳しく見ていきたい。

三 十三代集の「あらし」詠

勅撰集では『新古今集』の後、「あらし」詠は『続後撰集』神祇、『続古今集』雑下、『続拾遺集』雑下に一首ずつ見られるが、複数の「あらし」詠が入集するようになるのは『新後撰集』からである。次に、『新後撰集』以下の十三代集における「あらし」詠の分布を、『新編国歌大観』の本文によって掲げてみる（表中の数値は名詞「あらし」を詠む歌数。また集名の頭の丸数字は勅撰集の代数。なお『新古今集』は「さぞあらしの」と詠む一首〈恋三〉を含む）。

<p style="text-align: center;">6</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑中</p> <p style="text-align: center;">3 3</p>	⑮新千載集	<p style="text-align: center;">8</p> <p style="text-align: center;">雑中 恋三 恋一</p> <p style="text-align: center;">4 2 2</p>	⑬新後撰集
<p style="text-align: center;">5</p> <p style="text-align: center;">雑中 神祇 恋二</p> <p style="text-align: center;">3 1 1</p>	⑰新拾遺集	<p style="text-align: center;">7</p> <p style="text-align: center;">雑五 雑三 恋五 夏</p> <p style="text-align: center;">4 1 1 1</p>	⑭玉葉集
<p style="text-align: center;">18</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑上 恋五 雑春</p> <p style="text-align: center;">13 3 1 1</p>	⑱新後拾遺集	<p style="text-align: center;">4</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑中 釈教</p> <p style="text-align: center;">1 2 1</p>	⑮統千載集
<p style="text-align: center;">6</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑中 恋三 恋二</p> <p style="text-align: center;">2 1 1 2</p>	⑳新統古今集	<p style="text-align: center;">4</p> <p style="text-align: center;">雑下</p> <p style="text-align: center;">4</p>	⑯統後拾遺集
<p style="text-align: center;">8</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑中</p> <p style="text-align: center;">6 2</p>	*新葉集	<p style="text-align: center;">12</p> <p style="text-align: center;">雑下 雑上 恋二</p> <p style="text-align: center;">9 1 2</p>	⑰風雅集

歌数から見ても、『新後撰集』以降、「あらまし」が勅撰集に入集歌に詠まれるような歌語として定着したことがうかがえる。なかでも目立つのは、『風雅集』『新後拾遺集』『新葉集』という南北朝期の撰集であり、この三集は雑下への集中という点でも共通している。

なおこれと並行して、「嘉元百首」「文保百首」など、鎌倉から南北朝期に勅撰集の撰集資料として催行された応製百首歌においても歌語「あらまし」が流行している。なかでも『新後撰集』撰集に際しての応製百首であった「嘉元百首」は、雑歌への集中と歌数の多さに特徴があり、鎌倉

期の定数歌に「あらまし」が普及していく中で一つの転換点となっている。¹⁴⁰

さて、十三代集における「あらまし」は鎌倉後期以降、歌群としても登場し、配列という観点からも注目されるものになる。まず、複数の「あらまし」詠を採る初例である『新後撰集』（二条為世撰）雑中から、「あらまし」を含む歌群の一つを抜き出してみよう（いずれも百首歌等より採られた歌）「題不知」の歌なので詞書は省略する。以下、次節まで同じ。

行末のなにかゆかしきこしかたにうき身の程は思ひし
りにき (140・天台座主道玄)

ながらへばうき事や猶数そはんむかしもいまも物ぞか
なしき (140・平時茂)

世の中になほもつれなくながらへてうきをしらぬは命
なりけり (141・法印円勇)

行末もさこそとおもへばあらましのなぐさめだにもな
き我が身かな (142・円道法師)

せめてわが身のなぐさめのなきままにうきためしをぞ
今はかぞふる (142・藤原基顕)

世の中をうらむるとしはなけれども身のうき時ぞなみ
だおちける (142・道洪法師)

うき事を思ひつづけてねぬる夜は夢のうちにもねぞな
かれける (145・法印定意)

いつとてまかはらず夢はみしかども老のねざめぞ袖は
ぬれける (146・藤原能清)

物をのみおもひなれたる老が身にねざめせられぬ眺も
がな (147・平時広)

はかなくもわがあらましの行末をまつとせしまに身こ
そ老いぬれ (148・前僧正実伊)

見ても又ありしにもぬ面影や老をますみのかがみな
るらん (149・藤原(京極)為教)

「行末」を思い、現実の「憂き」ことを歎くうちに、「老」を実感していく、という展開になっている。本文中に種々の線を引いて示したように、いくつかの歌語を共有しながらテーマが転換されていくという、歌語の関連性を基盤とした構成が見てとれる。「行末」と絡んで登場する「あらまし」はその展開を推進する歌語の一つであり、現実の希望のなさと言う語として機能している。以下、このような「あらまし」の配列法は、二条為定撰の『続後拾遺集』『新千載集』などにも見える。『続後拾遺集』雑下では、身の行末を思う歌群の中に「なぐさむ」の語とともに登場し(1174・1175)、また「はかなし」「思ひ寝」の語を介して「夢」

の歌群の中に組み込まれている(121)。「新千載集」雑下では出家遁世の歌から懐旧の歌への転換点に「あらし」詠が置かれている(2108・2109)。

以上、「あらし」は、十三代集のうち鎌倉後期以降の撰集の雑部において、述懐や出家を詠む歌語として定着していくこと、そこでは「行末」「なぐさめ」「愛し」「身」「老」「夢」など、ある一定の歌語とともに詠まれ、またそれらの歌語とつながるように配列されていること、それによって、前後の歌群から浮き上がらないような工夫が凝らされていること(1)を指摘しておく。

四 南北朝期の「あらし」詠

さてそこで、「あらし」を多く入集させている南北朝期の三集『風雅集』『新後拾遺集』『新葉集』を見ていきたい。三集は前述のように、「あらし」詠の歌数の多さ、雑下への集中という面で共通している。そこには、この語に何らかの思いを託そうとした南北朝期の時代相が刻まれているのではないか。新古今時代以降、恋から雑へと変容を見せつつ詠み継がれてきた歌語「あらし」は、南北朝の動乱期に至って、その現実と対置されるものとして、これらの撰集の中でそれぞれの形で再生しており、その現実との対

置の仕方に三集それぞれの特徴が見出されるように思われる。

まず『風雅集』では、「あらし」詠十二首中九首を女性作者が占めるといふ点が特徴的である。その中で配列という観点から、心に任せぬうつつを生きる人々の夢とうつとの混濁が詠まれていく雑下の「夢」の歌群(1896~1911)に注目してみたい。「あらし」は次のように、その歌群のはじめと終わりに登場する。

あらしの心のままに見る夢を思ひあはするうつつもがな
(1896・寿成門院)

あはれにもうつつに思ふあらしのただそのままに見つる夢かな
(1897・徽安門院小宰相)

うたたねのはかなき夢のうちにだにちぢの思ひのありけるものを
(1898・藤原良経)

……(中略)……

ぬるがうちに見るよりほかのうつつさへいやはかななる夢になりぬる
(1910・藤原為基)

おどろかぬ昨日の夢の世を知らでまたあらしの明日もはかなし
(1911・為相女)

ある歌語(ここは「夢」)を軸として形成された歌群に、その軸となる歌語と絡んで「あらし」が組み込まれている。

『新後撰集』以来の配列法を踏襲するものであろう。また、歌群の前は身の憂さを思ふ述懐歌、歌群の後には懐旧の歌が続き、「あらし」詠はそれらと夢の歌との接点に位置している。1386の前は「世中の憂きたびごとになくさむるよしいくほどのなからましかば」（1385・徽安門院）である。その世の中の憂さを慰めるという語彙は、前節で見た「あらし」詠が形成する世界と近く、1386を導き出すものと捉えられよう。1386・1387で登場した「あらし」は、現実を反して心に思い描く願いとして、現実になわぬものを見せ、時にははかない現世の別名ともなる「夢」と錯綜していく。また1389では、夢とはこの世の謂であることに気づかず、明日に期待する心のはかなさを自省して、夢歌群の締め括りとするとともに、「昨日の夢の世」を回想する懐旧の歌群へと続いていく。以上、右の歌群の「あらし」は、夢と交錯するようなはかなさによって特徴づけられよう。

次に、『新後拾遺集』雑下の前半部は、基調として、憂き世を歎き、身と心とのありようを自省する出家詠が展開していく中に、「月」の歌群（1370～1383）に続いて、「あらし」という歌語そのものを軸として形成された歌群（1386・1389、1392・1397～1402）が置かれている。これほど同語が並ぶと、一見、類題集のようにも見えてしまい、『新後拾遺集』がその成立

事情から粗漏の多い集と言われていることも関係するのかもしれないが、やはり「あらし」のような特徴的な歌語を大量に集めていることは注目されよう。列挙してみる。

昔かな
たのむべき身にはあらねど行末のあらしにこそしは
しなくさめ
（1380・小倉実教）

ながらへてあるさへいとふ老いらくの身のあらしは
末のたまし
（1391・法印昌算）

あらしのかなふ世ならば捨てかぬる身の行末を猶や
たのまん
（1392・法印宗信）

また、
いかなれば我があらしの末をだに思ひさだめぬ心
るらむ
（1397・法眼聖承）

おのづから憂きを忘るる在増の身のなくさめは心なり
けり
（1398・二条為世）

あらしのなからましかば何をかは数ならぬ身のなく
さめにせん
（1399・法印有雅）

そむくぞとよそには見れどいにしへのあらし程は捨
てぬ身ぞ憂き
（1400・妙藤法師）

いとふべきあらしならで世の中のげに憂き時のなく

さめぞなき

(圓・昭覚法師)

思ひわび世の憂き時はあらましにいく度捨てし心なるらん

(圓・宗覚法師)

僧の歌が多い。「行末(末)」「身」「なぐさめ」に加えて、前者では「たのむ」、後者では「憂し」といった共通歌語を用いた歌が並ぶ。そのなかで「あらまし」は求めて届かぬものとして、また我が身の不甲斐なさを歎く人々のせめてもの救いとして位置づけられる。この中で¹³⁰「捨てかぬる」・¹⁴⁰「そむくぞ」「捨てぬ」・¹⁴¹「いとふべき」・¹⁴²「捨てし」とある四首の「あらまし」は出家に関するものと解されるが、他の歌の「あらまし」は一首一首の表現からは特定できない。見方を変えれば、「あらまし」という漠然とした語には、個々の願いの具体的な内容を訴えるよりも、失望の予感を孕んだ不安定な願望のあり方そのものを形象するものとして、「出家」などと言い切つて願望を特定した場合とは異なる表現効果が認められるように思われる。「あらまし」はその抽象性ゆえに、戦乱、政争が相次ぎ、王権であれ寺社であれ不安定な拠りどころにすがつて生きるしかない南北朝期の人々の、何かが不本意で何かが満たされない、現実ではないものを求めずにはいられないというような気持ち、大づかみに汲み取つた語として機能しうる

のではないだろうか。連呼されることで「あらまし」という概念的な物言いそのものが印象づけられる右の歌群は、そのような願望のあり方を体現しているように思われる。

『新後拾遺集』と同時代に編まれた『新葉集』の雑下後半部には、様々に我が身を歎く歌群と出家に関する歌群の間に、「行末」と「あらまし」の語を絡めて構成された歌群と捉えられる箇所が見出せる。次に抜き出してみよう(作者名の後の()は、小木喬氏前掲書を参照して補つたもの)。

(題不知)

中宮(長慶中宮・西園寺公重女)

かねてより知られぬ物の悲しきは有るにまかする行末の空

五百番歌合に

御製(長慶天皇)

今こそあれすむべきよのみやこ鳥わが行末のことやとはまし

題しらず

世泰親王家右京大夫

行末のあらましにのみなぐさめて今の憂き世をいととでぞふる

紀俊長

さてもわが身の思ひでに何をしていま行末の人にかたらん

新宣陽門院(後醍醐天皇皇女)

あらまし（138）の心のままにみる夢（138）の覚めてかはらぬうつともがな

従三位朝棟

いつまでと思へば身（139）をも歎かぬに何と涙の老（139）をしるらん

源重泰

老（140）となる身（140）をば歎かで行末（140）のあらまし（140）をのみいそぐはかなさ（140）

前参議長資

とにかくに我があらまし（141）のかはるこそ世（141）のうき時（141）の心なりけれ（141）

住吉社三百六十番歌合に、雑地儀を

中務卿宗良親王

道しらぬは山しげ山さはるとも猶（142）あらましの末（142）はとほさん（142）

千首歌たてまつりし時、寄海述懐

伊勢の海にしづまばしづめ身（143）のはてよつりのうけなるさまもうらめし（143）

歌群は「行末」と「あらまし」の語を軸として展開していく。この二語と絡み展開を推進する歌語として「なぐさめ」「憂し」「身」「夢」「老」が見出せる点は、為世・為民

撰の勅撰集の先例を想起させる。ただし、ここでは「あらまし」自体を「行末」と並び歌群中の主旋律を奏する語としており、その点において『新後拾遺集』と通じていて、両集が同時期に成立したことを思うと興味深い。

右に並ぶのはいずれも題詠歌か題不知の歌であり、作者名等を捨象して歌意のみを取れば、行末に思いを馳せる姿勢から、「あらまし」を夢想し、老いた我が身を振り返り迷いつつも、やはり「あらまし」を通すことを誓うという展開になっている。その中で宗良親王（144）の詠気の強さは、これまで見てきた「あらまし」詠と比べても特徴的なものである。また抽象的な歌が並ぶ中で、長慶天皇（145）の「都鳥」と、宗良親王（146）の「伊勢の海」という地名の持つ具体性も際立っている。この三首と作者に注目すると、右の歌群に新たな側面も見えてくるのではないだろうか。

五 『新葉集』雑下の「あらまし」歌群

歌群は長慶天皇とその中宮の「行末」詠によって始まり、宗良親王の「あらまし」を含む二首によって締め括られる。歌群の先頭と最後を『新葉集』撰進当時の南朝歌壇および政治の中枢にいた皇族で括るといふ配列は、歌群の方向性を定める上で重要な役割を担っているように思われる。

『新葉集』の配列論としては、小西甚一氏に恋歌を例とした分析がある。¹⁶⁾ 小西氏は歌群の配列に「進行」と「連想」の両原理を提示した上で、『新葉集』の特徴として、「連想」に細かい趣向が見出せること、それは二条派の和歌における細視的表現と通じていること、また配列関係による歌意の変換（一首の意味が他の歌との関係で変わる）が見られること、さらにその際、歌群の進行には連歌の感覚を基盤とした切断性（ある歌aが次の歌bと結びついて新しい意味に変換されても、その変換は次の歌cには影響しない）があることを指摘し、『新葉集』の撰者宗良親王を巧みな編者と位置づけている。確かに当該歌群にも、隣り合う歌が歌語や歌意によって関連しつつ全体として徐々に話が進行していくという展開は読み取れ、小西氏の分析が配列を考える際の基盤となることは感得される。ただし、小西氏が取り上げた恋歌は境涯の歌をほとんど含まず、『新葉集』の中ではむしろ特殊な巻ともいえる。右の配列論だけでは解釈しえない箇所もあるのではないか。当該歌群は、作者が背負う現実を呼び込んでくるような構成になっているのではないだろうか。

歌群冒頭二首目の長慶天皇¹⁶⁶詠には、「都鳥」というキーワードがある。これは在原業平の著名な鞆旅歌「名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」¹⁶⁷（古

今集・41）を踏まえた表現で、中世の鞆旅歌に散見される語だが、長慶天皇が「都鳥」がいれば問いたい「わが行末」というとき、それは京の都への帰還はかなうのかということだと解されよう。この歌と同じ天授元年（二三七五）の「南朝五百番歌合」で詠まれた藤原実興の歌「かりそめのあらましにのみ年もへぬさていつまでぞ鄙のすまひは」（雑三・97）でも、「鄙のすまひ」である行宮を脱して都に帰還することを南朝の「あらまし」と認識していたことが確認できる。¹⁷⁾ さらに歌群末尾に配された宗良親王の二首は、この長慶天皇詠に呼応する決意と述懐を述べたものと捉えられる。¹⁷²⁾ たとえ障害があっても行末に成し遂げようと強く願う「あらまし」は、親王の個人的な処世の悲願等ではなく、南朝の行末に関すること、すなわち南朝の悲願である都の奪回であろう。また¹⁷³⁾ に見える「伊勢」は皇室の氏神である伊勢神宮の所在地であり、南朝方の拠点の一つであった。中世まで「伊勢」と詠んで神宮を表す和歌は少ないようだが、「寄海述懐」題で詠まれたこの歌の初二句は皇統に身を捧げる意ととれるのではないか。¹⁷²⁾ は宗良親王の主催した天授元年住吉社三百六十番歌合詠、¹⁷³⁾ は長慶天皇に詠進した天授千首詠で、いずれも長慶天皇の¹⁶⁶⁾と近い時期の歌である。天授年間、吉野に帰山した宗良親王を中

心に南朝歌壇が活況を呈し、その中で『新葉集』の撰進計画が進められていったとされる時期で、この時期の歌壇の気風は『新葉集』の構成意識に直接反映していると思われる。当時の南朝歌壇に、「あらし」をめぐって都への帰還を思うという思考回路があり、それが当該歌群の配列に拘い取られているのではないだろうか。当該歌群は、長慶天皇と宗良親王の歌で括られることによって、南朝の悲願を示すという方向性を与えられていると考えたい。

その方向性に沿って、歌群中の他の「あらし」詠も読みかえられる。たとえば126は、長慶天皇の126を受けて、都に帰還する「行末のあらし」を想像することが都の外に流浪する「今の憂き世」を生きるよすがとなっている、と答えたものと読めよう。そうして行末に思いを馳せる中宮の歎きと天皇の問いに発した歌群は、南朝の行末を案じる人々の数多の歎きや感慨を孕みつつ展開し、それらを127が引き受けて、それでも最終的に南朝の「あらし」は貫くのだという意志を表明したものと解釈できるのではないか。通常の勅撰集では個人的な処世の願いとして登場する「あらし」が、ここでは撰歌と配列によって、南朝の行末を問うという政治性を顕在化させている点が特異であるように思われる。

ところで、右の解釈の要となる宗良親王の歌は、詠歌態度の対照性を組み込んだ展開の中に導き出されてくる。この歌の前に置かれた127は、一節で見た師賢詠等と同想の移り変わる「あらし」を詠んでいる。その願いが何から何に変わったのかということは定かではないが、ここでは「あらし」の内容よりも「あらし」を思う心のあり方、心の揺れに注目すべきなのだろうと思われる。この歌の隣に配置されることで、続く127の「猶あらしの末はとほさん」という意志の強さが引き立てられるからである。さらに続く127では、ここまでの強弱のある展開を念押しするかにように、我が身を皇統に捧げようという強さ（上句）と、その身を波間に漂う「釣の浮け」のように頼りないものと認識する弱さ（下句）が一首のうちに共存している。この歌群に仮構されている南朝の「あらし」をめぐる情景は、意志や希望一色に染められているわけではない。むしろ一連の強さと弱さの配合は、行末をめぐって希望と絶望の交錯する南朝人の心の揺れを体現しているように思われる。

『新葉集』撰進は、宗良親王と長慶天皇を中心として活況を呈していた南朝歌壇にとつて、改めて南朝の健在を誇示する記念事業であったろう。しかしまた、行宮で資料の揃わないままに成った歌集を勅撰集と認定することは、自

ら一種の諦めを提示することであったかもしれない。深津睦夫氏は、勅撰集の規格を満たしていない『新葉集』は「当初、将来の勅撰集撰集のための資料源たることをめざした私撰集として撰集作業が始まった」ものであり、それがあえて勅撰集となり得た背景に、京の都で正式な勅撰集を編むという希望をもちえなくなった「南朝の将来に対する長慶天皇と宗良親王の絶望の深さ」を読み取っている。「あらまし」が示すものは実現可能性の高い未来であったろうか。「あらまし」の語に反実仮想の「まし」に由来する願望の不安定さが揺曳しているのだとしたら、都への帰還という南朝の希望を述べたこの歌群に撰者宗良親王の行末に対する絶望が胚胎しているとも読めるが、うがちすぎであらうか。

以上、歌語の連関性に加えて、作者や詠歌態度にも注目することで、歌群が仮構している南朝の情景を読み解くことを試みた。これを『新葉集』の配列を論じる際の一つの態度として提示してみたい。

むすびに — 『新葉集』への一視座 —

中世初頭に一般化した歌語「あらまし」は、十三代集の時代、とりわけ南北朝期に雑歌の歌語として特化された。

それは現実に対置されるものとして、現実を厭い未来に期待し、出家を願う、あるいは現実と夢とを混同していくというような、伝統的発想による文脈の中に取り込まれていた。その中で『新葉集』雑下の「あらまし」歌群の解釈には、長慶天皇の「行末」と宗良親王の「あらまし」を起点として、都への帰還を願うという南朝の現実が呼び込まれている。それはもとの歌が含有していた意味を配列によって確定したもので、そこにはそのような方向性を提示しようという撰者宗良親王の意図が感じられる。一般に、我々が南朝和歌を読む際、作者の人生を表現の中に読み込まず、そこに南朝の悲劇という物語性を見出してしまいがちだとされるけれど、むしろ『新葉集』の配列構成の側に、南朝の苦難と悲願という物語を読み取るよう、享受者を誘導している面があるのではないだろうか。

宗良親王1272詠の、障害の多さを山道に喩える修辭は、新古今時代に評価された源重之の恋歌「筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」(新古今集・恋一・1013)を拱取したものである。また1273の「伊勢の海」「釣」「浮け」さらに「しづむ」を並べた表現は、古歌「伊勢の海に釣する海人のうけなれや心ひとつを定めかねつる」(古今集・恋一・509・読人不知)および「伊勢の海の釣のうけなるさまな

れど深き心は底にしづめり」(後撰集・雜一・1065・躬恒)に出所を求められるものである。ともに著名な古歌を踏まえた表現であり、題詠歌として穏当な手法であろう。しかしこの歌群に南朝の悲願を読み取るという文脈を得た享受者は、この二首に、南朝の拠点となった吉野周辺の山深さや、宗良親王自身が海に沈みかけた経験(延元三年(一一三三)八月、義良親王(後の後村上天皇)・北畠親房・同願信らと伊勢を出港、遠州沖で暴風に遭い難破した)といった現実の苦難の光景を重ねて読むことも可能になる。そのような解釈も許容されるのではないか。少なくともここに挙げた「あらし」歌群には、京都奪回という南朝の政治的意志を打ち出そうとする撰者の意図を読み取ることができる。『新葉集』の性格を考える際、勅撰性の有無ということが問題になるが、「あらし」歌群はこの問題に、集内部の構想から一つの視座を与えてくれるのではないだろうか。「あらし」歌群に背負わされた政治性——これは他の勅撰集の「あらし」歌群には見出せない『新葉集』の特徴であると述べた——は、都外の地で正式な手続きを経ずに成った『新葉集』がどのようなにして公的性格を打ち出そうとしたかを示しているように思われる。

中世歌語「あらし」は、伝統的発想を基盤としてそこ

に現実を対置しつつ取り込む機能を有しており、その機能をもっとも發揮しているのが、南朝の和歌である。宗良親王撰『新葉集』の「あらし」を含む歌群は、そうした機能を活用しつつ、宗良親王自身の歌をうまく配合して、勅撰集にふさわしい政治性を示そうとしたものである、と考へたい。

【注】

(1) 『新葉集』(南朝和歌)には、二条派風の伝統的な歌を基調とし、なかに現実の境遇を反映したいわゆる境涯の歌があるという捉え方が通説である。「境涯の歌」は、井上宗雄氏注(3)の書等に見える用語。また戦前の川田順『定本吉野朝の悲歌』(第一書房、昭和一四年)は、「直接又は間接に當年の時局に即して境涯を吐露した歌」を「悲歌」と呼ぶ。なお、そのような通説で捉えられる『新葉集』や宗良親王詠の歌群の実態を検討したものとして、早く島津忠夫「南朝歌壇とその行くへ」(大阪大『語文』一九五七年四月)がある。

(2) 小木喬『新葉和歌集 本文と研究』(笠間書院、一九八四年)、五二八頁。

(3) 新編日本古典文学全集『中世和歌集』(小学館)所収「新葉

和歌集(抄) (井上宗雄校注) 当該歌の頭注より。

(4) 師賢¹⁰番歌は詞書より元弘元年(一二三二)の詠。「純後拾遺集」は嘉暦元年(一二三六)完成、宣子は元亨元年(一二三

二)没。長経・宣子ともに『新後撰集』初出歌人である。

(5) 掲出本文は『相模集』(浅野家本)による。『後拾遺集』では第四句に、「さもあらましに」「さてあらましに」「さぞあらましに」という異同がある(『新編国歌大観』解題、藤本一恵『後拾遺和歌集全釈』(風間書房、一九九三年)、犬養廉・平野由紀子・いさら会『後拾遺和歌集新釈』(笠間書院、一九九七年)参照)。

(6) 関根慶子「『あらまし』こと」考」(『平安文学 人と作品とところどころ』風間書房、一九八八年)、大坪併治「『あらまし』こと」原義考」(『訓点語と訓点資料』一九九三年一月)。

(7) 第四句は後鳥羽院が主催した建仁元年「仙洞句題五十首」の宮内卿の歌「人とはで月にふりぬる浅茅生にただあらましの松虫の声」(208「月前虫」)に啓発され、摂取したものか。諸注、本歌として「思ひつつへにける年をしるべにてなれぬる物は心なりけり」(後撰集・恋六・101・読人不知)を指摘する。

(8) 『新編国歌大観』(底本は日本大学総合図書館蔵本)では「あらまし」詠は七首見出せるが、そのうち10番番歌は他本により

「あさまし」が正しいと思われるので数に含めない。

(9) なお平安時代の物語作品に見える「あらまし」こと」については、関根慶子氏と大坪併治氏が注(7)の論文で取り上げ、この語が実現困難な意を含むかどうか検討している。

(10) 但し『新後撰集』雑中の「あらまし」詠四首は「嘉元百首」の歌ではない。なお、深津睦夫『中世勅撰和歌集史の構想』(笠間書院、二〇〇五年)第一編第二章第二節は、「嘉元百首」について、撰集資料としての応製百首の役割が変化した転機と位置づけている。

(11) なお、『玉葉集』雑五の「あらまし」詠は、様々に世を憂い、身を厭い、出家を思う歌群の中に現れるが、配列で生かそうという工夫、前後の歌との関連性はあまり見られない。

(12) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』改訂新版(明治書院、一九八七年)七九八頁参照。

(13) 『新葉集』は天授年間から宗良親王が撰集を意識し、弘和元年(一二三二)十二月の奏覧、『新後拾遺集』は永和元年(一二三五)六月、後円融天皇が二条為遠に下命、永徳元年(一二三八)八月為遠没、為重が撰者を継ぎ、翌年四季部奏覧、全巻完成は後小松天皇の至徳元年(一二三四)十二月とされる。

(14) 『新編国歌大観』の底本では108と109の作者が逆になっており、掲出のように改訂している(解題参照)。なお108は、前掲の

『風雅集』1896「あらしの心のままに見る夢を思ひあはする
うつつもがな」と傍線部のみしか変らない。

- (15) なお、「あらし」の末を通すという表現自体には「あらしはさながらかはる身のはてにそむくばかりぞ末とほりける」(『風雅集・雑下・199・為守女』等、先例があり、とくに鎌倉末々南北朝期に集中して散見される。

- (16) 小西甚一『日本文藝史』Ⅲ(講談社、一九八六年)、四一九～四二四頁。

- (17) この歌合の判者宗良親王は、この歌を「かりそめのあらしならぬ末なれば」(判歌上句)と評して負とし、「あらし」が「かりそめ」ではないことを主張している。宗良親王の17と通じる態度である。

- (18) 片桐洋一「歌枕歌ことば辞典」増訂版(笠間書院、一九九九年)「伊勢」の項、および久保田淳・馬場あき子編「歌こと

ば歌枕大辞典」(角川書店、一九九九年)「伊勢」の項(島原泰雄執筆)で言及されている。

- (19) 深津睦夫「新葉集の撰集意識をめぐって」(桑原博史編『日本古典文学の諸相』勉誠社、一九九七年)。

- (20) 伊藤敬「新葉集」(和歌文学講座7『中世の和歌』勉誠社、一九九四年)参照。

*『新葉集』の本文及び歌番号は、『新編国歌大観』(奏覧本系の内閣文庫本を底本とする)による。また他書の和歌の引用も、とくに注記のないものは『新編国歌大観』所収の本文及び歌番号による。いずれも適宜漢字を当てるなど表記を改めた箇所がある。なお年号は、北朝関係の記事には北朝の年号を、南朝関係の記事には南朝の年号を用いた。